

# コムギ縞萎縮病による「タマイズミ」の減収被害を穂肥の増肥で軽減できました

コムギの土壌伝染性病害であるコムギ縞萎縮病は、土壌中のポリミキサ菌が媒介するコムギ縞萎縮ウイルス（WYMV）によって引き起こされます。県内でも本病害の発生が拡大し、抵抗性品種への切り替えが進められていますが、硬質小麦の主要品種「タマイズミ」には、すぐに置換できる抵抗性品種がなく、収量低下が問題となっています。

本病害への対策として、多様な穂肥の増肥が試みられていますが、その施用時期、回数そして施肥量を決める根拠がなく、また、本病による減収程度も十分に把握できていません。そこで、本病による収量への影響を把握し、増収に効果的な追肥条件を明らかにしました。



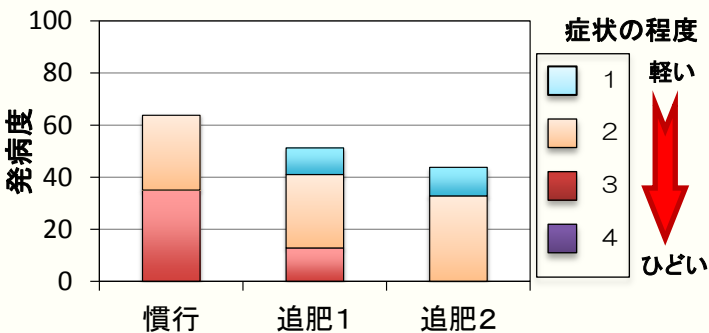
コムギ縞萎縮病を発症した「タマイズミ」

追肥条件 (10a 当たりの窒素量)

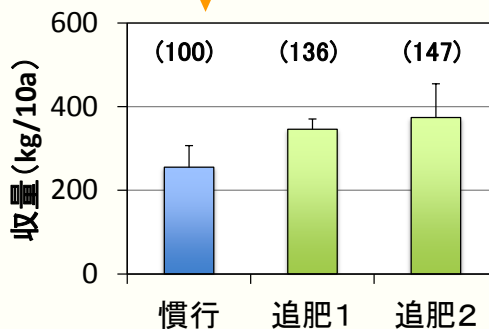
試験区	3月上旬	3月中旬
慣行	4kg	
追肥1	5kg (慣行に1kg増量)	
追肥2	5kg (慣行に1kg増量)	1kg

症状が緩和されました。

収量が増加しました。



発病度: 症状の程度を数値化したもの (低くなると被害も低下)



( )内の数字は慣行を100とした相対値

## (研究成果)

- ・コムギ縞萎縮病の発生を確認した圃場の「タマイズミ」に対して、2月下旬から3月上旬に、慣行の窒素分量に対し1kg/10a増量した総量5kg/10aにして、穂肥を施用することで、収量及び品質が高まり、本病害による減収被害を軽減できました。
- ・黄化症状確認後の穂肥施用前に窒素成分1kg/10aを施肥したり、穂肥散布後に2回目の追肥を行うことなく、1回の増量穂肥により収量が確保できるようになります。
- ・増量した穂肥施用後（3月中旬）に2回目の追肥（窒素成分1kg/10a）を行うと、さらなる増収が見込める場合があります。